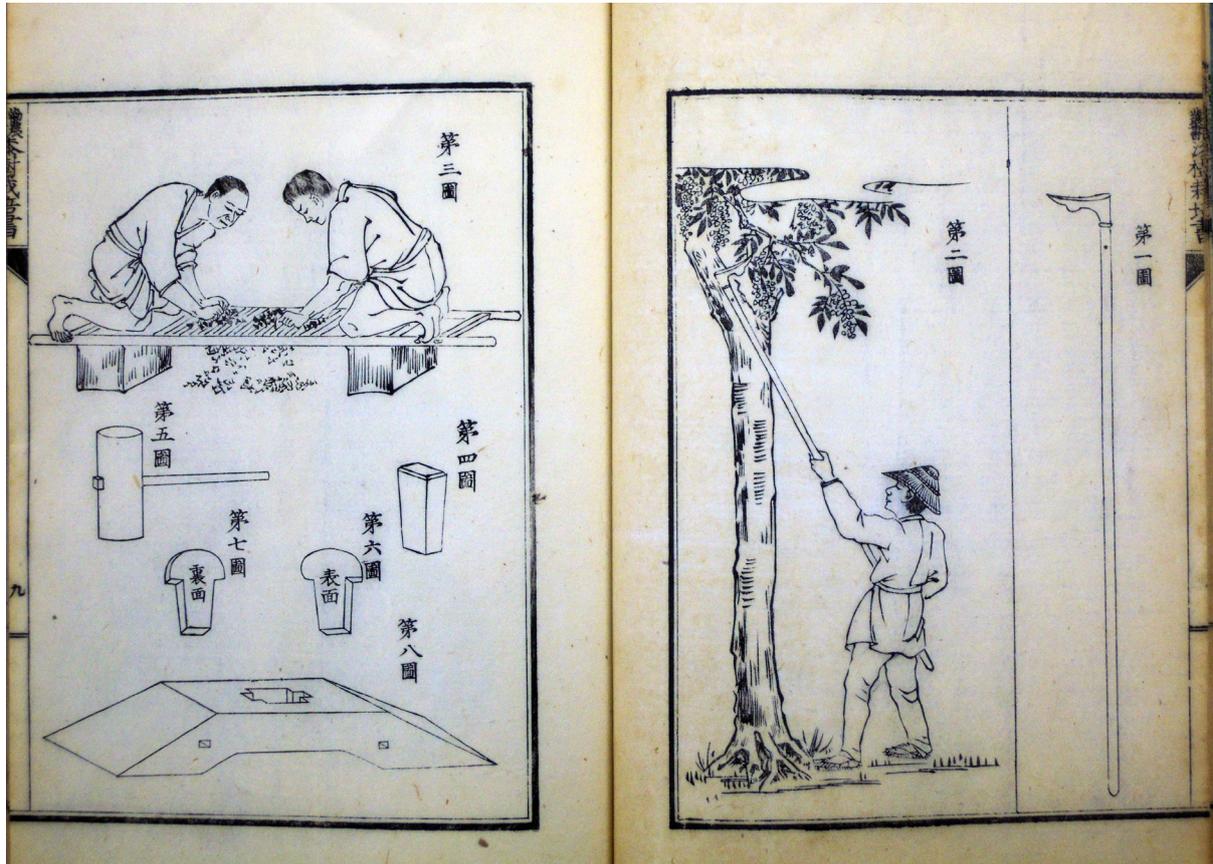


福島県史料情報

第50号 平成30年(2018)2月



製蠟器具図解説 (『漆樹栽培書』、個人蔵)

初瀬川健増の『漆樹栽培書』

会津の初瀬川健増と言えば、明治期に漆樹の栽培や漆の掻き取り技術の調査・研究に貢献した人物としてよく知られた存在であろう。

健増によって著された代表的な漆樹栽培の技術書である『漆樹栽培書』は、明治二十年(一八八七)に版權免許があり、会津の宮城三平の検閲を経て有隣堂から「勸農叢書」の一冊として上梓されている。さらに、この続編は、同じシリーズで明治二十二年に有隣堂から出版された。明治二十八年の再版に際して、正編にはオランダ領事館書記官のレヨン・ヴァン・ド・ポルデルの題字が加えられ、新たに図版を多く採り入れ、増補訂正がなされている。

刊行の目的は、主に海防や国産の漆樹栽培の振興にあった。その内容は、撰種・苗圃・整地・製蠟・製蠟器具図解説・漆液抓採・漆液ノ品位・漆液掻採用具図解など広範囲に及んでいる。

上図は、増訂版の正編で、製蠟器具図解説の部分である。第一図は、木実採鎌という漆の実を採るための道具で、杉や竹の柄に鎌を嵌め、第二図のように下から突き落とすように用いられた。漆樹の幹には、漆液を採取するために鉋で引いた横線の痕跡が見えている。第三図は、木実揉の様子で、梯子と二つに割った竹を組み合わせ、房状になった木実を盛り、両方から押し摺り付け、粒の実にした。

第四図の矢は、斧折樺や山桑など堅い木で造られた楔である。第五図は槌で、斧折樺・山桑・山梨などの木を用いた。第六図は、樺や槻から造られた形という道具で、第七図は形の裏面である。第八図は、蠟洞と称し、樺を材料として造られている。蠟の粉を入れた麻製の蠟袋を形で両側から挟み、それを蠟洞の穴に入れ、矢を左右の凸部の穴に差し込んで槌でたたいて圧搾したのである。

(渡邊 智裕)

坂上田村麻呂ゆかりの
謡曲「田村」

福島県内を舞台とした比較的知られている謡曲として、「黒塚」（観世流では「安達原」）や「撰待」などが挙げられるであろう。

さらに、ふくしまにゆかりのある人物とその伝説が素材となった演目となると、さらなる広がりを見せることになる。例えば、坂上田村麻呂にまつわる伝説は、今日でも田村市や田村郡に多く残されている。

謡曲の「田村」は、室町時代に成立したもので、二番目物にあたる。この演目の作者は、室町時代の能作者世阿弥とも言われているが、詳細については分かっていない。



田村（『観世流謡内百番』一、杉内重義家寄贈文書（その1）43）

『二十冊のうちの第一冊で、宝暦八年（一七五八）二月に京都二条通御幸町西へ入ル町の山本長兵衛によって刊行された新板である。この謡本は、杉内重義家寄贈文書の中にあり、二十冊とも揃っている。

「田村」は、勝修羅三番のひとつで、勝修羅とは勝ち戦の武将を主人公とした修羅能のことである。この演目は、前場と後場から成り、その梗概は以下の通りである。

東国の僧（ワキ）が京都に上り、三月の半ばに清水寺を訪れる。そこに箒を持った童子（前シテ）が現れ、地主権現に仕える者であると名乗り、清水寺の来歴を語る。また、童子が近隣の名所を挙げていると、やがて日が暮れて夜桜の映える宵を迎える。童子は、実は坂上田村麻呂の化身であり、舞いながら田村堂の中に消え、ここで前場が終わる。

後場になると、僧の前に清水寺の門前の者が現れ、清水寺の縁起を語るとともに、童子はおそらく田村麻呂の化身であろうと言い、僧に供養の読経を勧める。僧が法華経を讀経しているとき、武者姿の田村麻呂の霊（後シテ）が立ち現れる。田村麻呂は、かつて勅命を受けて鈴鹿山へ兵を進め、清水寺にある千手観音に参つて願をかけ、千手観音の御加護によって鬼神を退治したことを語り、後場は終わる。（渡邊 智裕）

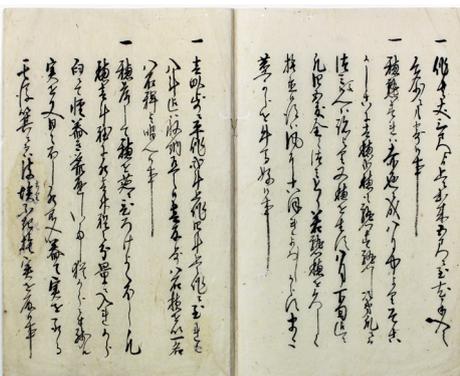
近世後期における
弘法稗の栽培法

磐前郡中島村（現いわき市）名主文書には、弘化二年（一八四五）頃に弘法稗の栽培法を書写した「弘法稗又者八石稗作方」（江尻英夫家文書二四七）が伝わる。弘法稗はイネ科の一年草「シコクビエ」の別称で、強健で収量が高い性質を讃した名称とみられ、弘法大師がもたらした言い伝えもある。近世期、稗は備荒食であり、人々の関心も薄かったが、弘法稗は大きな注目を集めた。

その栽培法は次の通りである。八十八夜前後の十日程を目安とし、一畝に三勺程の種を蒔き育苗を行なう。入梅の頃、苗が五寸程に伸びたら植え付け時で、千鳥懸で苗を植える。畑は砂地や石交じりの土地が好ましく、根は深く伸びる。その後、水肥（下肥）を二、三度やり、中耕を一回、草取りを一回行なう。草丈は三尺から五尺程に成長し、八月中旬には赤色に穂が実り始め、爪で収穫する。収穫した穂は再び実るため、八月下旬まで四、五度収穫できる。茎殻は牛馬に与えると良い。畑一畝に二斗から八斗収穫でき、一反で八石穫れるため八石稗とも呼ばれる。穂は干した後、水に入れて唐臼で挽き、一升挽くと一升三合の粉に

なる。この粉をヨモギや琉球芋と混ぜ合わせ、蒸して餅にすると非常に美味しい。また、粉を湯に入れて湯捏ねして炙ると非常に柔らかい。

本書の栽培法は、天保二年（一八三一）十二月に遷摩郡今浦村（現島根県大田市）庄屋の亀左衛門が提唱したものである。亀左衛門は伯耆国（現鳥取県中西部）海岸で栽培されていた弘法稗の強健さと収量の高さに目を付け、種稗と栽培法を地元を持ち帰って広め、大森代官も領内で試作を勧めた。時が経ち、弘化元年正月には、代官・奉行衆の間でも弘法稗への関心が高まり、亀左衛門の栽培法は書写で各代官領に広まった。本書も小名浜代官を介し写されたとみられる。また、田島代官領でも弘法稗栽培が普及しており、かつて弘法稗が盛んに栽培されていたことが窺われる。（小野 孝太郎）



〔弘法稗又者八石稗作方〕
（江尻英夫家文書 247）

村人たちの戊辰戦争5

慶応四年（一八六八）一月三日、京都南郊の鳥羽街道において、旧幕府軍と薩摩藩兵の戦闘が始まった。いわゆる鳥羽・伏見の戦いである。

この戦いに会津藩兵が参加していたことは有名であるが、その他にも、保原出身の医師が戦闘を間近で目撃していた。その体験を聞き取った書状によると、証言者は「保原医者二而、公儀医江附添難儀候仁物」で、開戦から敗北、さらには江戸への撤退まで旧幕府軍と行動を共にしている。

当初、旧幕府軍は戦闘を予期していなかったようであり、「薩長之敵人、此鳥羽ト申処ニ忍び居り、味方を目掛けて不意ニ大砲を打放され、一時にびつくり致候」とある。戦闘は翌日まで続き、旧幕府軍の負傷者は二百人ほど、死亡者も三十人にのぼったという。「保原医者」は、その治療や介護のため、慌ただしく戦場を駆け巡ったことであろう。

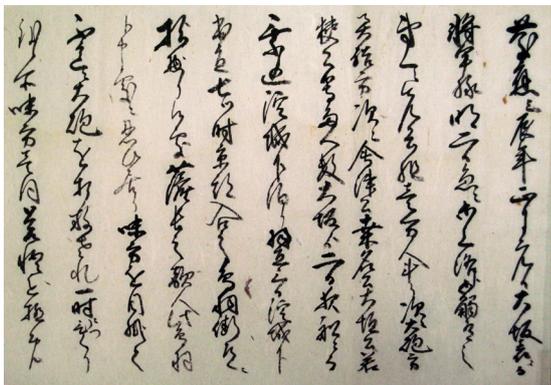
その後、会津藩兵の奮闘もむなしく、五日昼頃より敗色が濃厚となり、さらに六日には友軍の津藩（藤堂家）が「変心」したことで、七日になると旧幕府軍一行は紀州を目指して退却せざるをえなくなった。さらに同日、新政府が徳川慶喜追

討令を発したことで、慶喜は会津藩主松平容保らを連れて江戸に戻ってしまい、残された兵士たちもまた紀州藩より蒸気船を借りて江戸へと帰還する。

この「保原医者」が何者であるかは定かでないが、幕府御用医師の許へ修行もしくは奉公に出ている村医者ではないかと推察される。いずれにしても累代の旗本・御家人とは思われず、戦評も「公儀之勢ハ誠ニ弱し」と手厳しく、「只々強キ者会津公斗り、会津公人数無之候ハバ皆殺しニも可相成や」と述べている。

幕末期ともなると、この「保原医者」のように地域や身分の枠を越えて活躍する人々が現れ、思いもよらぬ形で戊辰戦争と関わることもあったのである。

（山田英明）



〔書状〕（堀江正樹家文書 641）

戊辰戦争と

石母田村の軍事拠点

戊辰戦争の開戦後、慶応四年（一八六八）三月、海路で仙台に入つた奥羽鎮撫総督（新政府軍）は、会津領に向け仙台藩兵を進軍させた。

翌四月、会津藩との戦闘に備えるため、同総督は仙台藩に対し軍事拠点の構築を命じ、信達両郡の桑折郡司代支配下の村で人夫が集められ砲台場・土手が築かれた。本誌第二十六号の藤田村（現国見町）砲台場をはじめ、同時期の伊達郡西根郷・信夫郡南部での軍事拠点構築の実態を知る上で、当館の史料が有用である。

その後、奥羽越列藩同盟結成により新政府軍との開戦を決めた仙台藩は、先の砲台場等の活用と増強を行ない、新政府軍が領土に迫ると信達両郡を防衛線とした。左図（佐藤五兵衛家文書七八）は、この頃築かれたとみられる伊達郡石母田村（現国見町）硯石山南西麓の砲台場の絵図



硯石系ぞ六之上御臺場（佐藤五兵衛家文書 78）

で、同年七月に名主の五兵衛らが描かせた。上が北にあたり、朱色は道、青色は川を示し、東西に奥州街道が走り、南北に滝川が流れ、川の東の小道は集落・真言宗西宮院へ続く。小道の東が硯石山で、丘陵上には西に向かつて半円形の砲台場が描かれている。黄色は砲台場敷地、灰色は土手を示し、敷地三畝三步、土手の長さ十六間半と記されている。土手は北・西部に切れ目が二ヶ所あり、射撃口の「砲眼」とみられる。丘陵下に岩を剝り貫いた横穴「蝦夷穴」の描写があり、これに因み「硯石系ぞ穴之上御臺場」と名付けられた。

また、上図と別に、硯石山南麓の砲台場の絵図（同文書七九）もあり、こちらは敷地二畝二十七歩、土手の長さ十六間、西向きに一ヶ所の砲眼が描かれている。両図は、砲台場の完成を報告し、同敷地の年貢減免を願い出るため描かれたことであろう。

そして、同年九月「御臺場潰地并くれ切地其外取調書上帳」（同文書八四）等と併せて分析するに、少なくとも石母田村には、字硯石に砲台場三基・陣屋一ヶ所・番屋二ヶ所、字駒場山に番兵陣場一ヶ所、字丸山に砲台場一基が築かれた。なお、陣屋・砲台場には基本的に仙台藩兵等が詰めたが、番兵陣場には竹槍で武装した村人が詰め、間道の見張りも村人が務めた。

（小野 孝太郎）

簿冊と配架

当館には様々な歴史資料が収蔵されているが、なかでも利用頻度が高いのが「明治・大正期の福島県庁文書」と呼ばれる史料群である。

これは、明治・大正期の福島県庁で作成・収受した行政文書の集合体であり、県の施策の決定過程などを知ることができる。そのため、県内外から多くの近代史研究者が来館し、行政文書が綴られた簿冊を熱心に読み込んでいる。

このように、利用者の関心は簿冊の内容に集中しがちであるが、整理・保存を担当する立場からすると、その形態にも興味深い情報が秘められている。

たとえば、書物を立てた時に下側(底)になる「地」の部分である。通常、史料を利用する際に、この部分を気にする人はほとんどいないが、明治期の簿冊をよく見ると、ほぼすべてに文字が記入されていることに気付くだろう。

これは、簿冊を平積みにしても内容が分かるように表題などを書き込んだものである。しかし、反対側(上部)の「天」には何も記載されておらず、このことから、明治期の福島県庁では、江戸時代と同様に、簿冊の天を奥に、地を手前にして、平積

みしていたと考えられる。

そうすると、次に気になるのは、そのような配架方法が、いつ頃まで行なわれていたのかということである。こうした日常的な事柄は記録に残りづらく、はっきりしたことは分からないが、地の状況を見る限り、大正期が一つの転機であったのではないかと推察される。

それというのも、明治末期から大正期にかけて、記載のない地が現われ始めるからである。つまり、この頃より簿冊を縦置きするようになり、地への記載が不要になっていったのではなからうか。

このように考えた時、併せて留意しておきたいのは、「背」への記載である。平積みによる配架の場合、背の部分に表題を記す必要はない。ならば、現在の背表紙は、縦置きが一般化した後に、改めて追加されたものとなるのであろうか。県庁文書をめぐる謎は尽きない。(山田 英明)



明治時代の配架方法 (推定)

歴史資料館の一年

展示関係では、三回の収蔵資料展を開催しました。まず、四月二十二日から七月三十日まで、「檜枝岐村文書の世界」と題して、檜枝岐村村政百年の記念に、同教育委員会から寄託されている史料を展示し、檜枝岐村の景観や生業、口留番所の役割などを紹介しました。続いて、九月

九日から十二月二十四日まで、「奥会津の古文書―長谷部家文書の魅力」と題して、福島県重要文化財に指定されている長谷部家文書を展示し、奥会津の産業や口留番所、戊辰戦争時の様子などを紹介しました。最後に、一月二十日から三月十八日までの「新公開史料展」では、『福島県歴史資料館収蔵資料目録第四八集』に採録した「佐藤五兵衛家文書」を紹介するとともに、本年が戊辰戦争開戦一五〇年にあたることから、

戊辰戦争関係史料も展示しました。館外の展示では、福島県立博物館で九月二十三日から十二月十日まで、福島県立図書館で一月五日から二月十二日まで、「檜枝岐村文書の世界」の移動展を開催しました。フィルム上映会は「日本の伝統文化」と題し、六月十七日、八月十九日、十月十四日の三回開催し、炭焼きや曲げ物作りなどの日本の伝統的

な生業を紹介しました。

古文書講座は八月十九日、九月二日・十六日・三十日の四回実施し、テキストには「檜枝岐村文書」を使用しました

地域史研究講習会では、当館の学芸員の他に中央学院大学の白水智先生と只見町教育委員会の渡部賢史氏をお招きして、史料から読み解く山村での生活の様子などをご講演いただきました。

また、国見町、棚倉町、相馬市、いわき市(二回)で開催された講演会に講師を派遣し、計五回の講演を行いました。

収蔵資料の整理も継続して実施し、本年度は森山区有文書(国見町)などの史料を中心に採録し、三月末に収蔵資料目録を刊行予定です。

この他、九月には、大学の博物館実習生七名を受け入れ、六日間に亘って実習を実施しました。

福島県史料情報

第 50 号 平成 30 年 2 月 25 日

編集・発行

公益財団法人 福島県文化振興財団

福島県歴史資料館

〒960-8116 福島市春日町5-54

TEL 024-534-9193 FAX 024-534-9195

URL <http://www.history.fcp.or.jp>

E-mail history@fcp.or.jp